

溝上 慎一の教育論(動画チャンネル) No337

(新著の紹介)

大学でどう学ぶか

— 80人の大学生の語りから導いた 4年間を無駄にしない成長の条件 —
濱中 淳子先生 (早稲田大学教育・総合科学学術院・教授)

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問
東京大学大学院教育学研究科 客員教授

<https://smizok.com/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

【プロフィール】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。

※公益財団法人電通育英会の研究委託を受けて行われています。

※本動画では字幕を付けていませんので、必要な方は「設定」で「字幕オン」にしてご利用ください。

(ご紹介)



濱中淳子

はまなか じゅんこ

早稲田大学教育・総合科学学術院・教授

東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻博士課程修了。博士(教育学)。リクルートワークス研究所、大学入試センター研究開発部、東京大学高大接続研究開発センター教授等を経て、2019年4月より現職。

単著に『検証・学歴の効用』(勁草書房, 2013年)、『「超」進学校 開成・灘の卒業生』(ちくま新書, 2016年)、共著に『教育劣位社会』(岩波書店, 2016年)、編著に『大学入試改革は高校生の学習行動を変えるか』(ミネルヴァ書房, 2019年)など



No329

(新著の紹介)

＜学ぶ学生＞の実像 —大学教育の条件は何か—

濱中淳子先生
(早稲田大学教育・総合科学学術院・教授)

動画チャンネル「溝上慎一の教育論」



濱中淳子 (2025). 大学でどう学ぶか ちくまプリマー新書

プロローグ

大学教員は「大学での学び」をどう語ってきたか 他

第1章 6人の物語——それぞれの4年間

第5章 学（校）歴の効果をどう読むか

学（校）歴の効果／学び習慣仮説の紹介／学業での成功体験とフットワーク 他

エピローグ

キーガン著『なぜ人と組織は変わらないのか』の議論／「適度な葛藤」と2つの条件／学びを「強制」できない日本の大学／学生の主体性に依存／「大学でどう学ぶか」は与件ではない

それではご覧ください

『大学でどう学ぶか』

早稲田大学

濱中 淳子

University
Universi

大学でどう学ぶか

濱中淳子 Hamanaka Junko

★——ちくまプリマー新書

482

Univer

「10単位落として」「低空飛行の4年間でした」「教授との議論は“洗礼”でした」「法学には興味がない」「論文を100本弱は読んでいます」「先生には思いつきでいいから」「楽な情報を先輩に聞いて履修」「中心です」「サークルが居

**約80人の大学生の語りから導いた
4年間を無駄にしない成長の条件**

フェードアウト」「大学」「教授から学べることは全て学ぼうと思って」「自分」「いままレポートを書いて」「インターンは一度も参加しませんでした」「自分に向かないことをあえてやる」

イラスト/せきやみき

chikuma
primer
shinsho

ちくまプリマー新書

筑摩書房 定価 946 円(10%税込)

20th
Anniversary

筑摩書房より2025.2出版

科学研究費補助金 基盤B 2020-2023
現代日本における「大学生の学習行動」に関する総合的研究

の成果として

同じ科研費の成果として、2024.12に勁草書房から出版した『〈学ぶ学生〉の実像—大学教育の条件は何か』がある。

ポイント4点

【アプローチ】

大学教員（研究者）目線からみえている景色を提示するのではなく、実在する学生の成長物語を手がかりに、学びと成長の関連性を描く。

【データ】

量的調査ではなく、質的調査。80名を超える学生へのインタビュー調査から、エリート私大に通う社会科学系6名の語りをメインに使用。

【枠組み】

ロバート・キーガンの構造発達理論を活用しながら分析。

【目標】

想定読者＝高校生や大学新入生→シンプルでありながら本質を外していない、そして適宜学術的な理論や概念を用いながら明快なストーリーを提示する。

ポイント4点

【アプローチ】

大学教員（研究者）目線からみえている景色を提示するのではなく、実在する学生の成長物語を手がかりに、学びと成長の関連性を描く。

【データ】

量的調査ではなく、質的調査。80名を超える学生へのインタビュー調査から、エリート私大に通う社会科学系6名の語りをメインに使用。

【枠組み】

ロバート・キーガンの構造発達理論を活用しながら分析。

【目標】

想定読者＝高校生や大学新入生→シンプルでありながら本質を外していない、そして適宜学術的な理論や概念を用いながら明快なストーリーを提示する。

教員と学生との距離

大学で学ぶ価値とは、すでにある知を身につけることではなく、これまで誰もみたことのない知を生み出すための知を身につけることだと、わたしは確信しています。

上野千鶴子先生

2019年東京大学学部入学式式辞より

- 興味のあることを学べる
- 広くて深い、世界の多様性に触れる
- やる気との戦い
- ディスカッションが増える
- 抽象的な内容を扱う
- 自分の意見を表現することが求められる

教員 = 研究のイメージ



学生 = 勉強のイメージ



ポイント4点

【アプローチ】

大学教員（研究者）目線からみえている景色を提示するのではなく、実在する学生の成長物語を手がかりに、学びと成長の関連性を描く。

【データ】

量的調査ではなく、質的調査。80名を超える学生へのインタビュー調査から、エリート私大に通う社会科学系6名の語りをメインに使用。

【枠組み】

ロバート・キーガンの構造発達理論を活用しながら分析。

【目標】

想定読者＝高校生や大学新入生→シンプルでありながら本質を外していない、そして適宜学術的な理論や概念を用いながら明快なストーリーを提示する。

調査の概要 ※社会科学系

	機関タイプ	所在地	調査期間	対象者数
N大学	ノンエリート大学	関西	2021-2022年度	18名
M1大学	中堅大学	関西	2022年度	8名
M2大学		関西	2022年度	8名
E大学	エリート大学	関東	2020-2022年度	34名
放送大学		関東	2021-2022年度	18名

→E大学の学生6名のストーリーをメインに描写・分析

◆マオの4年間

では、早速、学生たちのリアルな物語をたどっていくことにしましょう。

最初はマオです。有名な首都圏の私立中高一貫校出身であるマオの進学先は、社会科学を幅広く学ぶことができるS学部。進学してからの4年間、どのような時間を過ごしたのか、マオの言葉を交えつつ紹介します。

*

*

*

両親と同じE大学へ

大学合格実績で全国的にも有名な首都圏私立中高一貫校出身のマオ。「自由な校風」で知られる学校だが、マオは中高時代を「実際に入学してみたら、全然自由じゃなくて」「課題が多い」「すごく厳しかった」と振り返る。小テストや定期テストで合格基準に達しなかった場合、達するまで追試。マオも追試常連組だったそう。

いい思い出もある。マオは軽音楽部に入っていた。部活のみんなと演奏の練習をした



ポイント4点

【アプローチ】

大学教員（研究者）目線からみえている景色を提示するのではなく、実在する学生の成長物語を手がかりに、学びと成長の関連性を描く。

【データ】

量的調査ではなく、質的調査。80名を超える学生へのインタビュー調査から、エリート私大に通う社会科学系6名の語りをメインに使用。

【枠組み】

ロバート・キーガンの構造発達理論を活用しながら分析。

【目標】

想定読者＝高校生や大学新入生→シンプルでありながら本質を外していない、そして適宜学術的な理論や概念を用いながら明快なストーリーを提示する。

大学生の成長理論の検討

—*Student Development in College* を中心に—

河 井 亨

(立命館大学教育開発推進機構)

Considerations of the Theory of Student Development in Higher Education: A Review of *Student Development in College*

Toru Kawai

(Institute for Teaching and Learning, Ritsumeikan University)

Summary

The purpose of this paper is to consider the relationship between various theories of student development through a review of Evans, Forney, Guido, Patton, and Renn's *Student Development in College*. First, an overview of the history of student development theory and practice is provided. Second, general development theories, such as Erikson's identity theory and Kohlberg and Gilligan's moral development theory are examined. Third, student development theory is focused on, particularly Chickering's comprehensive seven vectors theory and Perry's cognitive development theory. Next, the author examines Perry's proposed theories of cognitive and epistemological development, Belenky's women's ways of knowing, King and Kitchener's reflective judgment model, and Baxter-Magolda's research on epistemological reflection and

大学生の成長理論の検討

—*Student Development in College* を中心に—

河井 亨

(立命館大学教育開発推進機構)

Considerations of the Theory of Student Development in Higher Education: A Review of *Student Development in College*

第 40 号

『社会システム研究』

2020年3月

1

査読論文

(Institute for Teaching and

大学生の成長理論の動向

—*Student Development in College* 第3版を手がかりとして—

河井 亨*

The purpose of this paper is to consider the relation between student development theory and practice is provided. Student development theory and Kohlberg and Gilligan's moral development theory, particularly Chickering's comprehensive seven vectors model, author examines Perry's proposed theories of cognitive development, King and Kitchener's reflective judgment model.

要旨

今日の大学教育では、学生支援が重点課題の一つである。本研究では、学生支援の基盤をなす「大学生の成長についての理解」をもたらす成長理論の動向を検討する。大学生の成長理論については、*Student Development in College* に収められる理論研究を中心にレビューする。理論を共通レパートリーとすることで、実践とその研究における共通理解を形成することが期待される。

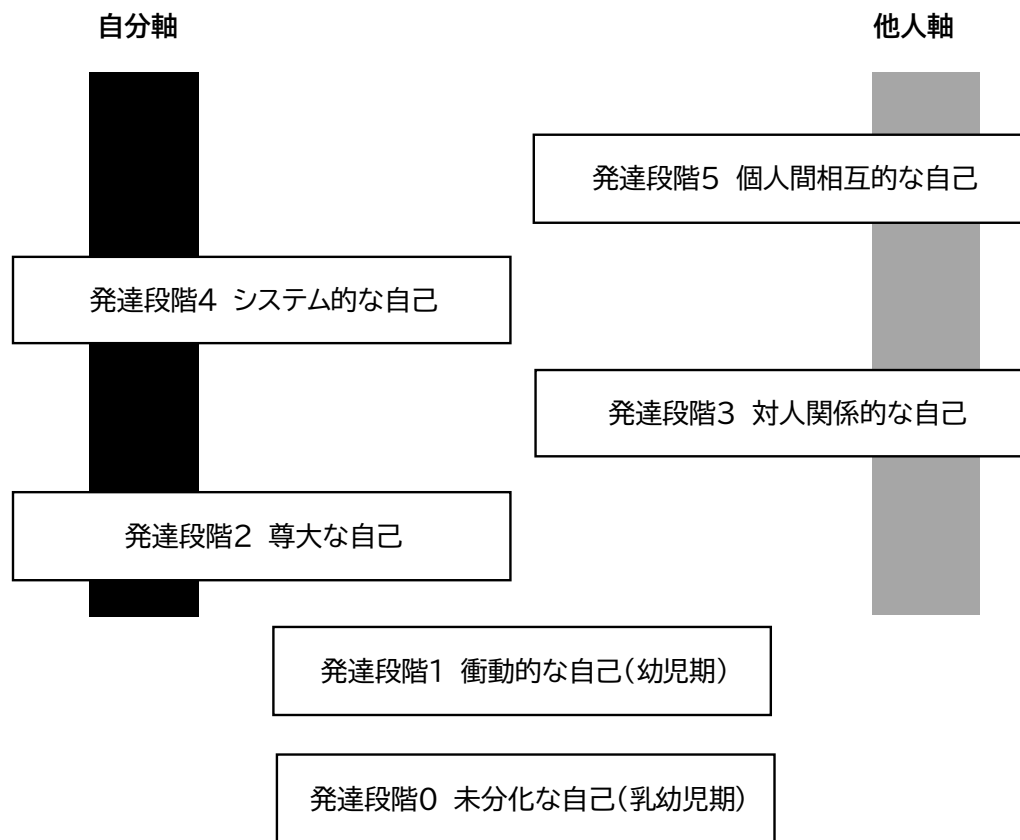
理論研究のレビューから、第2版から第3版にかけて、A. W. Chickering の7つのベクトル理論、W. G. Perry の知的・倫理的成長理論、M. F. Belenky らの認識の成長モデル、P. M. King と K. S. Kitchener の省察的判断モデル、M. B. Baxter-Magolda の認識論的省察の成長モデル、セルフ・オーサーシップ概念が重要な理論的知識として定式化されていることが確認された。さらに、大学生の成長理論の研究動向として、学生の社会的アイデンティティの成長とセルフ・オーサーシップの成長が強調されている。学生の成長についての研究では、社会的アイデンティ

1. 本研究の背景と枠組み

今日の大学教育では、どのように教育するかだけでなく学生がどのように学び成長するかに関心が向けられている。そうした関心と並行して、データに基づく教育改善の意義が強調され、学生の学びと成長に関する実証的な調査研究が進められてきている。

これらの調査研究では、学生の成長理論が実証研究の下敷きとして言及されている。具体的には、大学生調査・日本版新入生調査・短期大学生調査を含むJCIRP (Japanese Cooperative Institutional Research Program) や大学経営・政策研究センターの大学生調査では(金子, 2013; 山田, 2009)、E. H. Erikson のアイデンティティ形成理論とそれを発展させた A. W. Chickering の7つの発達のベクトル理論が言及されている(表1)。さらに、W. G. Perry の認知発達理論、P. M. King と K. S. Kitchener の省察的判断モデル、M. B. Baxter-Magolda の認識論的省察モデル、L. Kohlberg や C. Gilligan の道徳性発達モデルといった認知—構造理論や、パーソナリティ・タイプ理論などについても、その名前が触れられている(山田, 2009, p. 14)。また、包括的な人格的成長の理論を含むハンドブックとして、N. J. Evans らの *Student Development in College* が挙げられている(金子, 2013, p. 99)。しかしながら、いずれにおいても、言及されるに留まっており、学生の成長理論それ自体の検討は今後の課題とされている。また、京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会の大学生のキャリア意識調査の研究では(溝上, 2010)、Erikson のアイデンティティ形成理論とそれを包含する自己形成理論がベースとされている。しかしながら、そこには、Erikson を受けて発展していった Chickering や Perry およびそれ以降の成長理論についての検討は見られない。

河井亨2014「大学生の成長理論の検討—Student Development in Collegeを中心に」『京都大学高等教育研究』pp.49-61。



発達段階 2

基本的に自分の欲求、関心、願望を大事にしている段階。他者の感情や思考まで推し測ることはできず、他者の存在は自分の欲求、関心、願望を満たすため。

●○ 自己と客体の均衡 ○●

発達段階 3

他者の欲求や視点を自己のなかに取り入れ、自己の視点もその現実のなかで思考されるように。ただ、他者のことがみえはじめたばかりであり、対人関係に従属してしまう傾向も。

発達段階 4

他者とさまざまなことを共有しながらも自己を維持できるようになっているため、周囲に配慮しながら自律的に意思決定ができるように。

発達段階 5

他人の価値観を取り入れ、相互発展を目指すように。自己と他者の感情や視点の違いは、不安や不和の原因ではなく、受け入れられるものに。

ポイント4点

【アプローチ】

大学教員（研究者）目線からみえている景色を提示するのではなく、実在する学生の成長物語を手がかりに、学びと成長の関連性を描く。

【データ】

量的調査ではなく、質的調査。80名を超える学生へのインタビュー調査から、エリート私大に通う社会科学系6名の語りをメインに使用。

【枠組み】

ロバート・キーガンの構造発達理論を活用しながら分析。

【目標】

想定読者＝高校生や大学新入生→シンプルでありながら本質を外していない、そして適宜学術的な理論や概念を用いながら明快なストーリーを提示する。

自分軸

他人軸

リョウヘイ

発達段階4 システム的な自己

発達段階5 個人間相互的な自己

ワカバ・メイ

発達段階2 尊大な自己

発達段階3 対人关系的な自己

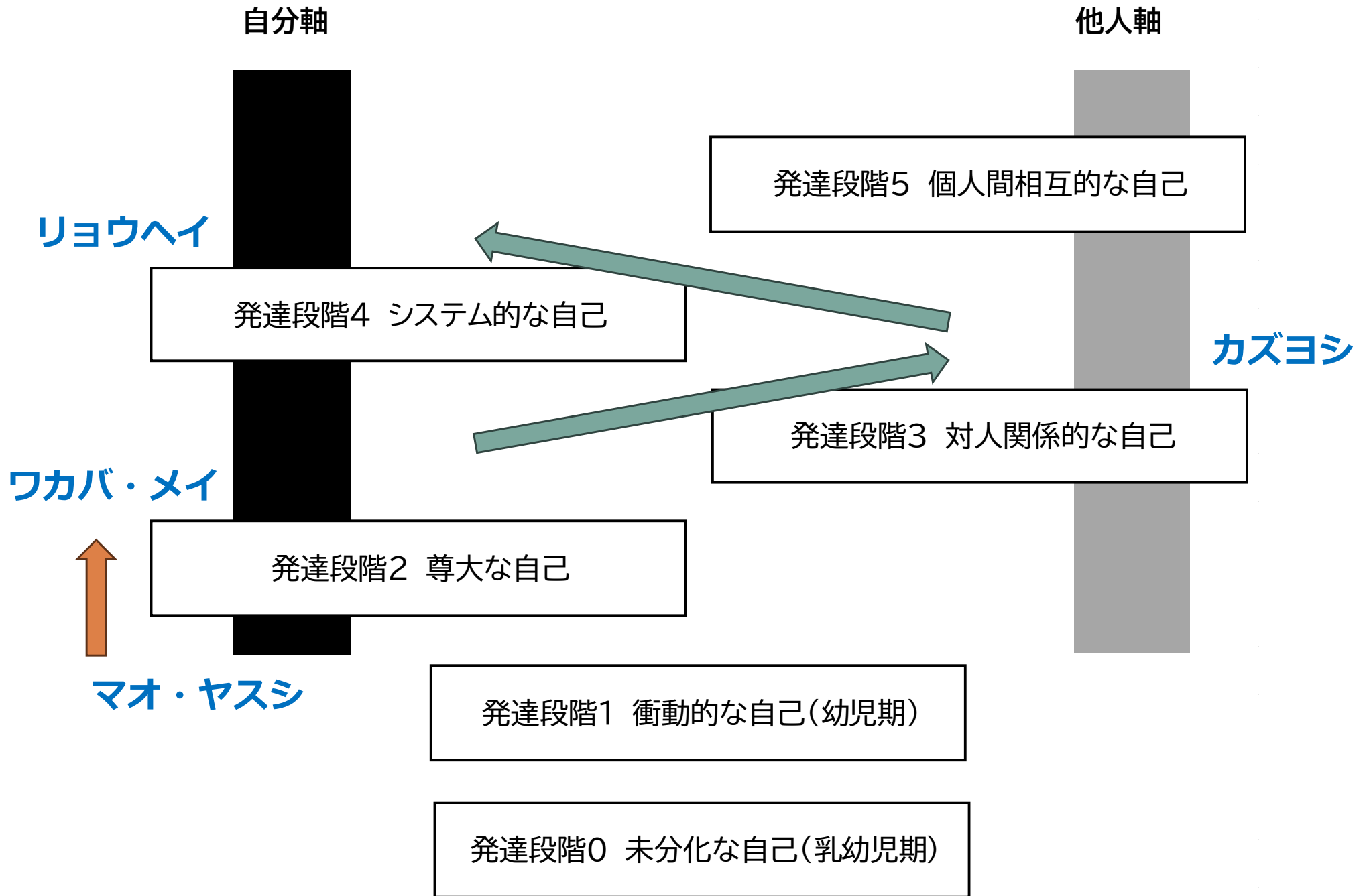
カズヨシ



マオ・ヤスシ

発達段階1 衝動的な自己(幼児期)

発達段階0 未分化な自己(乳幼児期)



2つの成長条件



アウェイの世界に飛び込む

関連する学術理論の紹介



教員を活用する ※「研究」と「成長」の関係

その他...

①学（校）歴の効果をどう読むか

②キーガン著『なぜ人と組織は変わらないのか』の議論との関係をどうみるか

③「大学でどう学ぶか」は所与ではない

などについても議論

どういう場面、どういう人に読んでもらいたいのか